

齋藤素影 さとう 小説家、俳人。明治十一年四月十五日富山縣生れ、
昭和二十年九月歿（二八六一九五）。本名八郎。初め『北國新聞』、『文
庫』等の投稿、桐生悠々、田村松魚等を知る。小説家志として二十歳
の折上京、松魚の紹介で辛田露伴の入門。當時向島蝸牛庵には松魚の
他、米光、關月、神谷鶴伴等が同居してゐたが、素影は牛込の寄宿先か
ら白参して指導を受けた。作品は『文藝界』、『新小説』、『文藝演
義』等から發表。單行本は小説『戀のなやみ』（明治二十六年一月）
、『金港堂書籍株式會社』がある。また飾の主唱した新短詩型『四行詩』
を作る最好會が組織せられ、自らも試作、その成果を同會編『はつし
ほ』（明治二十八年十一月）二十六年泰山堂）に収録。その後略十年間
の作家生活の見切りをうけて歸郷、農生活に入りた。傍ら『ホトトギ
ス』同人となり高濱虚子の師等、爾後俳句の創作の活路を得、俳號は
本名を通じた。

歿後『齋藤八郎句集』（鹽谷贊編、昭和二十三年九月十六日富山・齋
藤越郎刊）が上梓せられ、幸田文が跋文を寄せてゐる。なほ子の越郎
の『蝸牛庵覺文書』（昭和六十二年十月二十日自刊）の一書があり、

「父素影齋藤八郎のこと」を附載。